

《博士論文要旨および審査報告》

凌 飛 「否定疑問文「(の)ではないか」 についての研究」

——学位請求論文——

I 論文要旨

凌 飛

本研究では、否定疑問文「(の) ではないか」という形式、及びその類似表現である「じゃん」について考察した。まず、コーパスを用いて2形式の使用実態を調査し、そして、実際に用いられる用例の分析を行い、それぞれの用法を明らかにした。

本研究は5つの章に分けた。その内容は以下の通りである。

第1章では、「(の) ではないか」と「じゃん」に関する先行研究をまとめた。

第2章では、現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下はBCCWJと呼ぶ）を用いて、「(の) ではないか」のバリエーションを調査し、整理した。結論として、「(の) ではないか」にはバリエーションが多くあり、バリエーションごとの使用頻度も使用傾向も異なり、それぞれの特徴があることが分かった。

第3章では、BCCWJから収集した「(の) ではないか」のバリエーションの各レジスターにおける分布を考察し、それぞれの使用頻度と使用傾向を明らかにした。

第2章と第3章の内容を通じて、「(の) ではないか」にはバリエーションが多くあり、バリエーションごとの使用頻度も使用傾向も異なり、それぞれの特徴があることが分かった。

第4章では、職場コーパスという会話コーパスから収集した用例を分析し、意味的・構文的特徴から、「(の) ではないか」を3分類した。そして、構文的特徴からだけでなく、文法化の度合いは視点からも各分類の相違点について考察した。結論として、「(の) ではないかⅠ」の構文上において、「(の) ではないかⅡ」と「(の) ではないかⅢ」より制限が多く、文法化の度合いがやや高い。さらに、「(の) ではないか」には細かい用法が多くあり、各用法は完全に異なるものでなく、そ

の間に連続性が見られた。

第5章では、「(の)ではないか」の類似表現である「じゃん」について述べた。まず職場コーパス、CSJとCEJCという3つの話し言葉コーパスを用いて、「じゃん」の実態調査を行った。これで、「じゃん」は「(の)ではないか」と違い、あまりバリエーションがなく、「じゃん」、「じゃんか」と「じゃんね」という3つの形に限られることが分かった。そして、「じゃん」は広い年齢層に渡り使用されているが、特に20代による使用が多いことも分かった。さらに、実態調査の後に、CSJと職場コーパスから収集した用例を分析し、実際に使われる「じゃん」の用法をまとめた。「(の)ではないか」と「じゃん」の重なる用法として、発見、提示と確認の3つがある。東京方言話者（松丸（2001））の内省によると、「じゃん」は上昇イントネーションをとることで、推測にも使えるとなっているが、今回の調査では、そのような用例はなかった。

Ⅱ 審査報告

| | | |
|--------------|-------|-------|
| (主査) 専修大学文学部 | 教 授 | 高橋 雄一 |
| (副査) 専修大学文学部 | 准 教 授 | 阿部 貴人 |
| (副査) 別府大学 | 客員教授 | 松本 泰文 |

凌飛氏の学位請求論文「否定疑問文「(の)ではないか」についての研究」は、現代日本語における「(の)ではないか」の諸用法についての総合的な研究である。

凌氏は、天津外国語大学大学院の修士課程在学時からこのテーマに取り組み、専修大学大学院博士後期課程でも研究を続けてきた。博士課程在学中には4本の論文を発表し、うち3本がそれぞれ博士論文の一部となっている。

現代日本語の否定疑問文「(の)ではないか」については、これまでいくつかの研究があり、どのような用法のタイプがあるかは一通り明らかになっているが、まだ研究の余地のある分野と考えられる。また、今回、凌氏が併せて取り上げて

いる「じゃん」については、地域方言や首都圏の新方言として「(の)ではないか」とは別に論じられることが多かった。下に凌氏が序論で挙げている用例を引用する。

- (1) これはすごい、純金ではないか。
- (2) A：同級生に田中さんという女の子がいたじゃないか。
B：ああ、髪が長くてやせた子ね。
- (3) ここにあるじゃん。

凌飛氏の研究は、記述的に用法を分類している諸研究を把握した上で、独自の分類を示し、さらに、国立国語研究所等が作成した現代日本語のコーパス（ここではコーパスとは「言語を分析するための基礎資料として、書き言葉や話し言葉の資料を体系的に収集し、研究用の情報を付与したもの」とする）を利用した調査により、確実な根拠をもとにした調査結果を示したものである。さらに、「(の)ではないか」に類する表現として、首都圏を中心に共通語の中で使われる「じゃん」も研究対象とし、「(の)ではないか」と関連付ける立場で先行研究を参照し、コーパスによる調査を行い、独自の論を展開したものである。

以下、博士論文の内容を章ごとにまとめて述べる。

まず、第1章「先行研究の概観」では、1980年代の終わりからの「(の)ではないか」についての研究の進展をまとめている。「(の)ではないか」は、本来は否定疑問文であるものが確認要求などの機能を持つようになったとされる。また、確認要求表現などの用法は、聞き手に共通認識を要求するかしないかによってタイプが分けられる。こういった先行研究における議論の多くは凌氏の修士論文でも取り上げられているが、今回、新たな文献も加え、より深い理解と共にまとめ直している。さらに、博士論文では2種の研究を加えている。1つ目は「文化化」である。これは一般言語学において通言語的な観点から歴史的変化について論じられるものであるが、凌氏はそのような文献も参照した上で、特に日本語を対象とした研究の可能性を論じている2つの文献についてまとめている。これは後の章で「(の)ではないか」の分類について検討する際に役立てられる。2つ目は「じゃん」である。地域方言であったものが首都圏で新たな意味・機能を獲得して広まったとする研究と、それを「(の)ではないか」と関連付けて確認要求表現の一つとして論じている研究をそれぞれ参照している。

次に、現代語のコーパスによる調査結果が示されている第2章「BCCWJによ

る「(の)ではないか」の実態調査」と第3章の「各バリエーションにおける使用傾向と使用頻度」、さらに調査を踏まえて凌氏自身の論を示した第4章の「(の)ではないか」の分類と用法」について述べる。この部分の内容は、凌氏がこれまで発表した3本の論文が元になっている。第2章では、「(の)ではないか」が取りうる様々な形式を「文末詞の変化」「タ形との共起」「丁寧形」「終助詞との共起」「(だ)ろう」の共起」という下位分類として整理し、現代語の各種の書き言葉を集めたコーパスを使用して、実際によく現れる形式と現れない形式を調べている。第3章では、先述のコーパスに含まれる様々な種類の文章ごとに、どのような種類の文章にどのような形式が現れるかということ調べている。第4章では、仕事の場面での話し言葉のコーパスからのデータを利用しながら、凌氏自身の「(の)ではないか」の分類を示している。凌氏の分類も、基本的には先行研究と同様に「(の)ではないか」を大きく3つに分類するものである。ここではまず、3つの大分類について、構文上の区別や文法化の度合いを見ている。その上で、凌氏によるより詳しい内訳について説明をしている。

第4章で話し言葉のコーパスによる調査をしたことにより、話し言葉には「じゃん」が多用されることが分かった。第5章の「「じゃん」について」では、各種の話し言葉のコーパスを使用し、「じゃん」の使用実態を調査している。この章はこれまでと同様の詳細な議論は尽くされていないように見受けられるが、十分に納得の行く結果は示されている。

最終試験（口述試験）では、主に次のようなことが指摘された。

まず、論文の題目で「否定疑問文「(の)ではないか」としている点についてであるが、確かにもともと「(の)ではないか」は否定疑問文であるので、“出発点”としての名づけと言えるが、否定疑問文ではない部分も含めた総称としては適切な名称を考えるべきではないかという指摘があった。また、本文中で使われる「バリエーション」についても、本来は「同じ意味を表す変異形」という意味で使われるので、少なくとも「(の)ではないか」のタイプごとに区別されるべきではないかという指摘があった。

第2章、第3章のコーパスを利用した調査については、「(の)ではないか」の「の」はどのような場合にあり、どのような場合にかははっきりと示した方がいいという指摘があった。また、今回は後接形式に注目したが、前接形式にも注目することにより、「(の)ではないか」のタイプによって違いが見られるの

ではないかという指摘があった。さらに、コーパスの種類にも関係して、要素分析をする際には書き言葉、話し言葉の違いに注目すべきであるという指摘もあった。

第4章で示されている凌氏の分類については次のような指摘があった。まず、文法的に可能とされる形式でも、実際には用例が現れない場合に、「その後接形式とは共起しにくい」と述べるのには疑問があり、「一緒に現れにくい」というように言うべきだという指摘があった。これに関しては、文法的に可能とされる形式の中で現れやすいもの、現れにくいものを区別することについて言及している文献もあるので参照してもらいたいという指摘もあった。また、「ようではないか」を意志の表明と勧誘を表すとすることについて、それは「よう」が表現していることであって「ではないか」の意味・機能ではないのではないかという指摘もあった。これは先行研究の問題ではあるが、それを凌氏が克服することを期待するコメントもあった。

「じゃん」については、「(の)ではないか」と同様の詳細な記述があるという指摘があった。これに関しては、本文では形容詞が前接する例が多く挙げられているが、動詞が前接する例もあるはずだという指摘もあった。また、今回の調査では「じゃんか」のデータは得られなかったようであるが、方言辞典では「じゃんか」という形式が取り上げられていることも指摘された。

以上のように多くの指摘があったが、審査の結果、凌飛氏の論文は、これまで別々に論じられることの多かった「(の)ではないか」と「じゃん」を統一してとりあげ、実例にもとづきつつ形式から意味・用法に渡って精査を進めていることから、高く評価されるものと考え、博士の学位を授与するに値する論文と判定した。

Ⅲ 学位授与要記

- 一、氏 名 凌 飛
二、学位の種類 博士(文学)

- 三, 学位記番号 博文甲第六一号
- 四, 学位授与の条件 学位規則第四条第一項該当
- 五, 学位授与年月日 令和二年三月二十二日
- 六, 学位論文題目 否定疑問文「(の)ではないか」についての研究
- 七, 審査委員
- | | | | |
|----|---------|------|-------|
| 主査 | 専修大学文学部 | 教授 | 高橋 雄一 |
| 副査 | 専修大学文学部 | 准教授 | 阿部 貴人 |
| 副査 | 別府大学 | 客員教授 | 松本 泰丈 |